

2015年7月30日(木) 2校目

上演2

佐賀県 佐賀東高等学校

# 「ママ」

第39回全国高等学校総合文化祭  
第61回全国高等学校演劇大会

## 講評速報

生徒講評委員会 担当委員

村上 さくら (大阪府立北かわち阜が丘高等学校)

望月 綾香 (北海道登別明日中等教育学校)

上野 駆有 (三重県立四日市西高等学校)

観劇中、客席からすすり泣く声が聞こえてきた。私たちもその一人だった。母と子のつながり、お互いを思う気持ちが心を引きつけてはなさない劇だった。

病に倒れベッドの上で横たわっているママ。その傍らに高校生の一息子のコハル、彼は今まさにママに人工呼吸器をつけて延命治療をするかしないかの選択を迫られていた。その時、従姉妹のトキコが昔ママの書いた台本とそこにはさまれていた手紙を持って来る。その内容は劇中劇として語られていくが、その中でコハルはママの人生とママの自分に対する思いを知っていく。

最初の劇中劇に入るところのスポットライトで役者を追っていく演出は観ていて観客をわくわくさせ、物語に引き込まれていった。終盤での小さいコハルがママを追いかけるのにすれ違うシーンでは、照明のやさしいオレンジの光が切なさをもたらし、ただ振り返る事しか出来ない寂しさに胸を締め付けられた。最後の夢の中でコハルとママが月食を見るシーンでは、赤い照明を使ってうまく月食が表現されていた。

延命治療という重い話が役者のパワフルさで救われていた。一人ひとりの役者の個性が集団演技の時もちゃんと紛れずに主張されていた。また声の力強さ、豊かな表情や大胆で大きな動きに圧倒された。劇中劇のオリジナルの歌とダンスは印象的で、音楽が耳に残り、ママからコハルへの思いがよく観客に伝わった。

今生きていることの価値が分からないコハル。しかし、ママの台本や友人の手紙から、ママが台本を放り投げて、コハルを一人で育てる道を選択した事を知る。「この子は私、私はこの子」というママの台詞から息子を大事に思う気持ちが読み取れた。そしてコハルは生まれてくる前からママに愛されていたことを知る。劇中劇で、ママの夢や思いを知ったコハルは延命治療をやめることを決心する。生きる価値を見だし自ら決断したコハルの姿に心から感動した。

この作品は、母親の存在のありがたさ、子どもへの愛情、希望・夢をもって前を向いて生きようということを教えてくれた。また、伝えられる内に伝えなきゃだめだと気付かされた。私たちにもいつか親との別れが来る。だからこそ、親ともっと話して、自分が生まれる前の親の人生を聞きたい、そして自分たちも親の思いを受け継いでいこう。そう思わせる感動がこの劇にはあった。

